瀬切れをめぐる社会的背景

滋賀県立大学・名誉教授　龍谷大学里山学研究センター・研究員
秋山　道雄

瀬切れが発生する背景には、自然条件と社会条件がある。前者としては、扇状地（涸れ川）、天井川、渇水年等が該当する。後者としては、利水目的の取水（主として農業用水）、過剰な河川開発、河川への還元の有無等が該当する。琵琶湖集水域は、自然条件、社会条件ともに、瀬切れを発生させる条件が揃っている。とりわけ社会条件については、水利慣行の古さと水利紛争の多発は、この地の農業水利の特性であった。

今回事例としてとりあげる愛知川水系は、複合扇状地で、それに由来した水利形態は多様（河川、湧水、地下水、溜池に水源を依存）でかつ複雑であった。第二次世界大戦後、従来、愛知川の水に依存していた水田の3.6倍に及ぶ受益地域を抱えた愛知川沿岸土地改良区が成立し、その水供給を満たすために永源寺ダムが建設された。その後の農業用水への需要増大も加わって、永源寺ダムへの負荷は増し、愛知川への放水は制約される条件が増していた。

農業用水需要の増大と内部水利秩序の跛行性から、水源をダムのみには依存できず、ダム下流に頭首工を設置して愛知川に流れる表流水を取水するほか集水渠を建設して伏流水も取水し、かつ稲の穂孕み期にはダムから愛知川への放流水を義務づけられていないといった事項が加わって、８月後半には愛知川に瀬切れが発生するという状況が生じている。愛知川沿岸土地改良区の受益地域では、現在も「水不足問題」が発生しており、それへの対応として水供給体制を補強する国営土地改良事業が進行中である。そのため、当面は瀬切れが解消される目途はたっていない。

この問題は、河川における水利秩序の再編と関わる内容を含んでいるので、短期間における解決は困難である。農業水利の基盤における変化を環境保全に活かすようなビジョンを共有できる戦略が求められるところであろう。